抑圧されたアイデンティティ ― 反フィッシャー論者の言説から見た「フィッシャー論争」

渡辺　将尚

1．問題の所在

第１次大戦は，世界的覇権を手に入れようとしていたドイツが，難色を示すオーストリアをけしかけて積極的に推し進めたものであり，そこには「第１次大戦から第２次大戦へと至る，ドイツの歴史の連続性」[1] を見出すことができるとしたフリッツ・フィッシャーの著書『世界的強国への野心』(1961年初版）は，歴史学者を中心に激しい反発を呼び，「フィッシャー論争」と呼ばれる大規模な論争へと発展した。[2] フィッシャーの本は，ドイツ内外の膨大な史料に基づいており，かなり大部なものであるが，一貫して証明しようとするのは，宰相ベートマン=ホルヴェークおよび当時のドイツ政府，外国に駐在する大使・外交官といった政治レベルにおける戦争遂行の意志である。たとえば，オーストリア皇太子が暗殺（1914年６月28日）された翌月の状況について，フィッシャーは以下のように言う。

> ドイツ政府は初めから，オーストリアとセルビアの軍事的衝突を望んでいた。ドナウ君主国〔＝オーストリア〕の国力を強化することで，バルカン半島に無制限に影響力を行使し，それによってドイツを中心とした同盟が，三国協商に対して，より強固に対峙できるようにするためである。[3]

1）『世界的強国への野心』初版の序文に登場する文言である。Fritz Fischer: Griff nach der Weltmacht. Die Kriegszielpolitik des kaiserlichen Deutschland 1914/18. Erste Auflage. Düsseldorf(Droste) 1961. S. 12. なおこの本には，1967年の要約版に基づいた邦訳がある（フリッツ・フィッシャー（村瀬興雄監訳）:『世界強国への道』岩波書店，1972年）。

2）これより前に，フィッシャーは同一のスタンスに基づく論文を２本「歴史学雑誌(Historische Zeitschrift)」に発表している。１つは1959年の第188号に掲載された「ドイツの戦争目的 ― 東方地域の変革と単独講和1914-1918」，もう１つは第191号（1960年）掲載の「錯誤の連続 ― 第１次世界大戦におけるドイツの戦争誘導政策の問題について」である。

3）Fritz Fischer: Griff nach der Weltmacht. Erste Auflage. S. 69. 政府要人の中にも戦争に慎重な人物たちがいたことはフィッシャーも認めている。しかし，彼が論証したいのは，政府内の大半，そして何よりも宰相自身が，そうした反対意見があったにも関わらず戦争を望んでいたということである。反フィッシャー論者がもっとも反発したのもこの宰相の戦争意図に関する点である。なお，本稿では，引用文中の〔　〕は引用者が

なぜ当時のドイツはそこまで対外拡張政策にこだわらなければならなかったのか。その理由としてフィッシャーは，戦争の必要性を説いた軍人ベルンハルディの言葉を引きながら，この見解を政府も共有していたとした上で，ドイツにとって大陸内における経済上のライバルであるフランスの存在を挙げている。

> ベルンハルディはつぎのことをドイツの世界制覇のための第一歩と位置づけていた。すなわち，フランスを，二度と我々を邪魔立てできないように「完全に打ちのめしておく必要がある」ということである ―― これは，開戦後まもなく作成された，ベートマン＝ホルヴェークの９月綱領と字句の上でもほぼ一致する。[4)]

このような主張にもっとも早く反論を試みた１人に，ハンス・ヘルツフェルトがいる。彼は「歴史学雑誌」191号（1960年）において以下のように言う。

> フィッシャーは，〔ドイツが〕一貫して戦争目的綱領に定めた内容を追求し続けたことを強調しているが，その一貫性は，現状および今後の国としての可能性を判断する際に，これまで述べた政治のどのレベル〔＝政府だけでなく，さまざまな政治関係者，さらには民衆をも含む。ただし軍部はここに含まれない〕も一様に陥ってしまった，誤りの一貫性なのである。これは厳然たる事実なのであり，見逃すことはできない。[5)]

補足のために加えたものを指す。一方，ドイツ語原文において使用されている（　）は，訳文でもそのまま（　）を用いるものとする。

4）ibid. S. 50. この「邪魔立て」の具体的内容について，初版ではこれ以上の詳細な記述はないが，後の数度に渡る改版の中でフィッシャーは自ら論の補強を行っている。この辺りのフィッシャーの主張を，本人以上に効果的に要約しているのはフィッシャーの批判者の１人エグモント・ツェヒリンである。「ドイツの経済拡張政策は，第２次モロッコ危機以来，袋小路に陥っていた。バルカンとオリエント（バグダッド鉄道）の利権をめぐるフランスとの競争に，ドイツの銀行がますます勝てなくなっていること，およびロシアがパリから独占的に資金提供を受けているということが，ドイツ政府に，経済上の主敵であり，『反ドイツ連合の中心』であるフランスを封じる手立てを考えさせる契機となった。」（Egmont Zechlin: Krieg und Kriegsrisiko. Zur deutschen Politik im Ersten Weltkrieg. Düsseldorf(Droste) 1979. S. 32.「第２次モロッコ危機」（1911）とは，モロッコでの内乱を機に発生した独仏間の争いであり，ドイツはカメルーンを獲得する代わりにモロッコを放棄し，モロッコはフランスの保護国となった。）

5）Hans Herzfeld: Zur deutschen Politik im ersten Weltkriege. Kontinuität oder permanente Krise? In: Historische Zeitschrift. Bd. 191 (1960). H. 1. S. 76.「戦争目的綱領（Kriegszielprogramme）」とは，いよいよ戦争に踏み切るに当たって1914年９月にドイツ政府が作成した，戦争によってドイツが獲得すべき利益を具体的に記したものである（上記注釈

ドイツが戦争に踏み切ったことは，もはや否定のしようもない。しかしヘルツフェルトによれば，時の政府が戦争を初めから望んでいたというのではない。状況の判断を誤ったことによって，戦争へと突き進んでしまったのである。では，判断の誤りとは何だろうか。ヘルツフェルトは，戦争を望む軍部と，各種プロパガンダに煽動された大衆という「二重の圧力」[6] に政治が屈し，結果同調せざるを得なくなったのだと言明した上で，判断の誤りの内容を論文の最終段落において以下のように要約する。

> こうした戦争誘導政治は，ドイツの力の非現実的な過大評価という，総じて衝撃的な幻想〔の産物〕なのだ。[7]

戦争を望む者，大衆を煽動する者，戦争に終始反対だった者，当初反対しながらも最終的には煽動に同調してしまった者等，当時のドイツにはさまざまな考え方・立場があった。戦争を望んだ者だけに目を向けたり，ベートマン＝ホルヴェークの一時の態度を個別に取り上げれば，たしかに戦争遂行の意志があったように見えてしまう。しかし，個別の事象にとらわれず，当時の状況を総体的に見渡せば，ドイツ全体を覆っていたのは，自らの力に対する誤った判断だった，ということである。

これと同様の主張をより辛辣な口調で展開し，フィッシャーにもっとも激

４の引用で，フィッシャーが「９月綱領」と言っているのもこれである）。綱領の内容は，1963年にこの論争を取り上げた「デア・シュピーゲル」に簡潔かつ具体的にまとめられている。「ベートマンの戦争目的綱領の核心は，いわゆる『中央ヨーロッパ構想』にある。つまり，フランス，ベルギー，オランダ，デンマーク，オーストリア，ハンガリー，ポーランド，場合によってはイタリア，スウェーデン，ノルウェーを取り込み，ドイツ主導の中欧経済同盟を打ち立てることであった。」（Rätsel am 9.9. In: Der Spiegel (34/1963) S. 41f.）

6）「当時の政策中枢にいた人物たちが交わした真に率直な会話をもとに，彼ら —— ツィマーマンのような非貴族出身者は別として —— の思考の核心に迫ろうとすれば，彼らが軍部と民衆という二重の圧力（Doppeldruck）のもとで，自らの考えを自由に表明できなかったことは明らかである。」（Hans Herzfeld: Zur deutschen Politik im ersten Weltkriege. S. 76.）ツィマーマンは，1916年から，非貴族階級出身者として初めて外務大臣を務めた人物である。政策中枢にいた他の貴族出身者たちは誰も戦争を望んでいなかったが，そうした考えを自由に表明することはできなかった。一方，ツィマーマンはそうではない。ヘルツフェルトにとって，彼はドイツの拡大を狙って積極的に戦争を推し進めた側に属しており，それを民衆出身ゆえのものと揶揄している。

7）ibid. S. 82. 引用文中の「戦争誘導政治」は原文では Kriegszielpolitik である。しかしこの語は，「戦争目的綱領」に掲げられた権益を確実に我がものとするよう戦争を遂行し継続するための諸政策を意味するものとして用いられている。したがって，本稿ではこの語を「戦争目的政治」のように直訳はせず，文脈に応じて「戦争誘導政治」「戦時下の政治」などと訳出する。

しく反論したのは，ゲルハルト・リッターである。「歴史学雑誌」第194号（1962年）に掲載された論文「新たな戦争責任論？」で，リッターはベートマン＝ホルヴェークが戦争は避けられないと思っていたことは正しいと認める一方，以下のように言う。

> しかし，彼〔＝フィッシャー〕は彼〔＝ベートマン＝ホルヴェーク〕を，明らかに「全ドイツ同盟」の国粋主義者バッサーマンと，そればかりか軍国主義者ルーデンドルフと同列に置いている。ルーデンドルフの傍若無人な併合主義とベートマン＝ホルヴェークの政策との違いは，内容というよりもその実現方法にあり，両者は単なる程度の差でしかないのだという。[8)]

ドイツは戦争によって領土を拡張し，ヨーロッパの覇者となるべきだと煽動する「全ドイツ同盟」，あるいはルーデンドルフに代表される軍部等，当時のドイツ国内に戦争を望む動きがあったことには反論しない。しかし，時の政府までもがこぞってその動きに加担していたという点になると，ヘルツフェルト同様，リッターも徹底的に異を唱える。それではなぜベートマン＝ホルヴェークは戦争を不可避と思い，開戦に踏み切ったのか。リッターは次のように言う。

> ７月危機時のドイツの政治は，間違った思惑〔Fehlspekulation〕に基づいていた。つまり，ほぼすべての要素において誤った評価を下していたのである ―― ロシアとフランスの戦争準備については過小評価，暗殺がヨーロッパの宮廷に与える影響とイギリスの平和路線については過大評価していたのである。[9)]

ここで，ヘルツフェルトとリッター，両者の主張に共通する特徴が見えてくる。いずれも，第１次大戦時のドイツを矮小な存在に位置づけているということである。当時のドイツに戦争に勝利する戦力はなかったにもかかわらず，自らの力を過信し，重大な判断上の誤りを犯していたのだと言う。

このような主張をするのは，当時のドイツに，戦争を行う意志，ましてや世界的覇権を手に入れようとする意志はなかったことを論証するためである。しかし，ドイツの好戦性あるいは野望の存在を，自国の姿を矮小化する

8） Gerhard Ritter: Eine neue Kriegsschuldthese? Zu Fritz Fischers Buch „Griff nach der Weltmacht.“ In: Historische Zeitschrift. Bd. 194 (1962). H. 3. S. 655.

9） ibid. S. 659.

ことによって否定する論法が，その背後に別の主張を含んでいるケースがある。1986年から西ドイツの新聞紙上を中心に，第２次大戦の原因について議論が繰り広げられた「歴史家論争」である。この論争において，歴史学者エルンスト・ノルテは，ロシアにおいて革命を成就させた共産主義の波が自国にも及ぶのではないか，野蛮な共産主義国家が自国に害を加えるのではないかとの「不安（Angst）」[10] から，ドイツは軍事攻撃に出たのだとの主張を展開した。つまり，ドイツが先に攻撃を行い，それを発端として第２次大戦が始まったことは認めるが，その攻撃は，弱い立場ゆえの自己防衛だったというわけである。ただし，以前拙論 [11] において示したように，「不安」から思わず攻撃に出てしまったことを言うことがノルテの意図ではない。彼が真に描きたかったのは，当初は恐れを抱くしかなかった共産主義の野蛮さを最終的には自らも身に付け，世界的覇権を目指して ―― 結局は実現しなかったものの ―― 強国をも震え上がらせた当時のドイツの強さである。こうした主張をする背景には，80年代の西ドイツが東西の冷戦構造にすっかり取り込まれ，世界の覇権を狙うどころか「中規模国家」[12] に成り下がっていることへの批判がある。

「フィッシャー論争」においては，「アイヒマン裁判」，「アウシュヴィッツ裁判」，学生運動等，50年代の終わりから60年代にかけての「過去の克服」に関する動きに後押しされ，フィッシャーの見解が大きな支持を得るに至った。[13] また70年代には，早くも学校教科書が，フィッシャーの見解に基づいて第１次大戦像を描くことになる。[14] しかしその一方で，一見敗者に見える論者の主張には，主流ではないとの烙印を押された側の，現状に対する異議

10）「それ〔＝アウシュヴィッツ〕は，ロシア革命の抹殺過程に対する，とりわけ不安に端を発する反応だったのである。」（Ernst Nolte: Zwischen Geschichtslegende und Revisionismus? Das Dritte Reich im Blickwinkel des Jahres 1980. In: Historikerstreit. Die Dokumentation der Kontroverse um die Einzigkeit der nationalsozialistischen Judenvernichtung. München(Piper) 1987. S. 32.）

11）拙論：「アジア的」，「好戦的」，「男性的」なナチズム ―「歴史家論争」の再検討 ―〔「ドイツ文学論集」第51号〕2018年，39-53頁。

12）Ernst Nolte: Vergangenheit, die nicht vergehen will. In: Historikerstreit. S. 40.

13）クラハトは，フィッシャーの本が歴史家を中心に当時の人々の間でこれほどまでに大きな反響を呼んだ背景として，「アイヒマン裁判」や「アウシュヴィッツ裁判」を無視することはできないと指摘している。（Klaus Große Kracht: „An das gute Gewissen der Deutschen ist eine Mine gelegt.“ Fritz Fischer und die Kontinuitäten deutscher Geschichte. In: Jürgen Danyel, Jan-Holger Kirsch, Martin Sabrow(Hrsg.): 50 Klassiker der Zeitgeschichte. Vandenhoeck & Ruprecht(Göttingen) 2007. S. 68.）

14）Bernhard Olpen: Fritz Fischer im Nationalsozialismus. Der Weg eines Historikers im Spannungsfeld konservativ-reaktionärer Erziehung, sozialkritischer Einflüsse und persönlichen Karrierestrebens. Saarbrücken(Verlag Dr. Müller) 2010. S. 18.

申し立てが潜んでいる可能性がある。ノルテ同様，ヘルツフェルトやリッターに別な意図が存在するのかどうか —— 後に明らかにするように，それは確かに存在するのであるが —— 存在するとすればそれはどんなものなのか，本稿において考えたい問いはこれである。

２．ドイツを過大評価していたのは誰か

まず，ヘルツフェルトのテクストから，より詳細な分析の目を向けていくことにしよう。すでに引用したように，彼は「こうした戦争誘導政治は，ドイツの力の非現実的な過大評価という，総じて衝撃的な幻想〔の産物〕なのだ」と言うことによって，ドイツに戦争を遂行する意志がないばかりか，そもそもその能力がないことを示そうとした。ところで，この引用には２つの問題がある。第一に，「過大評価」していたのは誰なのかが不明確な点である。「ドイツの力の非現実的な過大評価（unrealistische Überschätzung der deutschen Macht）」は無冠詞の名詞で表されており，文脈上あるいは文法的には主体が特定できない。第二に，そうした過大評価の産物とされる「戦争誘導政治」という語自体がはらむ問題である。ヘルツフェルトは当論文において，1914年９月にドイツ政府が作成した「戦争目的綱領」を中心に据え，そこで表明された意図がベートマン＝ホルヴェークの真意ではなかったこと，またその後，戦火が拡大していく中でも，ドイツ政府は一貫して戦争遂行には懐疑的であったことを主張してきた。しかし，問題の引用では，Kriegszielprogramme が Kriegszielpolitik に置き換わっている。この相違は重要である。なぜなら，「綱領」を対象としている限り，ベートマン＝ホルヴェークおよび当時のドイツ政府の意図のみを問題とせざるを得ないが，「政治」と置き換えれば，ドイツの舵取りに影響を与えたすべての層を含むことが可能になるからである。つまり，この２点から分かるのは，論文の最終段落に属するこの引用において，ヘルツフェルトは明らかに自説 —— 戦争に踏み切ってしまったのは，ドイツの力を過大評価した結果である —— の適用範囲を拡大しようとしているということである。

ヘルツフェルトは，政府以外に誰をこの枠組みに引き入れたいのだろうか。これに関してテクスト内に直接的な明示はない。しかし，それ以前の箇所にあるいくつかの伏線を注意深く読み解いていけば，その答えを知ることができる。すなわち，軍部と，重工業関係および国粋主義者たちを中心とする民衆という，政府に圧力をかけ戦争へと導いた２つの勢力である。彼は〈政府対 軍部・民衆〉の構図ではなく，この３勢力を「過大評価」というキーワードで一括りとして捉えようとしているのである。

２つの勢力のうち，まず軍部について，ヘルツフェルトは，当時の海軍提

督ゲオルク・フォン・ミュラーの手記の内容をまとめる形で以下のように述べる。

> カード遊びのようなむなしさ，〔他の軍人たちの〕「血に飢えた」夕べの団欒でのおしゃべり〔を聞く退屈さ〕，突然訪れる意気消沈，そうした感情の間で振り回され続ける人生の無意味さへの怒りが，この手記全体の不気味な底流をなしている。[15)]

「血に飢えた」，つまりただ戦争を行うことだけが目的である軍部の雰囲気の中にあって，ミュラーは次から次へと要求をエスカレートさせていく状況をたえず批判的な目を持って見つめていた軍部の良心として位置づけられており，この手記から引用される部分について，ヘルツフェルトはその内容に完全に同意している。ミュラーによれば，そうした好戦的な雰囲気を作り出していたのは，軍内で絶大な権力を誇っていた「ルーデンドルフの狂気じみた思い上がり」[16)] だったのだと言う。この「思い上がり（Überhebung）」は，まさに自ら（あるいはドイツ軍）の力の「過大評価」であり，このくだりにおいて，そうした過大評価が当時の軍部を動かしていたことが表明されていると言える。

一方，民衆については以下のようにある。

> 戦時下の政策〔Kriegszielpolitik〕を，初めから軍事的状況に広範囲に依存させ，決定の自由を著しく奪った，ドイツの可能性の過大評価〔Überschätzung〕。それは同時に，民衆の世論とも結びついていた。民衆も広い層に渡って，1918年の９月までドイツの戦況の深刻さを認識せず，軍部びいきと上に述べたような錯誤〔＝ドイツの可能性を過大評価していたこと〕によって，政府に従うか軍部に従うかの選択において，手遅れになるまで後者を選び続けたのである。[17)]

引用２行目には，はっきりと「過大評価」という語が使われている。民衆もまた軍部と同じ思考を持ち，同一歩調を取り続けた。つまり，第１次大戦

15）Hans Herzfeld: Zur deutschen Politik im ersten Weltkriege. S. 72.「血に飢えた」の部分は原文でも引用符（» «）が付されており，ミュラーの手記に実際に登場する語であることを示している。原文では，この後に手記のページが示されている。

16）ibid. S. 73.

17）ibid. S. 75f. この部分はミュラーからの引用ではなく，ヘルツフェルト自らの主張として語られている。ここも Kriegszielprogramm ではなく，Kriegszielpolitik である。政府に限定せず，当時の国内の状況全体について語りたいからである。

時のドイツは，政府も軍部も民衆もみなこぞって，ドイツの力や可能性を過大評価していたと主張している。しかしそのように価値観を共有していながら，すでに見たように，戦争に積極的だったのは軍部と民衆のみであり，政府は戦争遂行には慎重であったのだと言う。これは明らかに支離滅裂な主張である。なぜなら，思考という観点では軍部と政府を同列に置く一方，行動という観点では逆に違いを強調しているからである。ではなぜこうした主張が展開されなければならないのだろうか。

3．「弱い」ドイツ政府 ― ヘルツフェルトの異議申し立て

これまでの引用で政府について確認できたのは，軍部と民衆という二重の圧力によって，自由な意思決定ができなかったということであった。これは一見すると，戦争遂行の責任は政府ではなく軍部と民衆にあるという主張にも見えるが，それが自動的に政府の擁護になるわけではない。むしろそれは政府の弱さへの批判となる。政府を軍部と民衆と同じ範疇に入れ込む意図も，まさにここにある。つまり政府は，ドイツが戦争を有利に進められると思っていながら，自らの意志だけでは戦争へと踏み出すことができなかったのである。したがって，ヘルツフェルトの論文に時の政府を擁護する意図はない。[18)]

軍部の要求をほとんど呑まざるを得ず，最悪の状態を避ける方策を打つのが精一杯の政府の状況について，ヘルツフェルトは以下のように言う。

> しかし，こうした連邦宰相の立場の違いと弱さ〔Schwäche〕は，1916年の終わりから17年の初めにおいてこれまでより強く表に出てくるようになり，この時期立てられた戦争計画が，たとえそれを呑んだという結果に対する責任はあるとしても，ドイツ政府にとってそれがどこまで真の意図なのかは疑わしくなってくる。[19)]

この引用だけを見れば，連邦宰相，つまりベートマン＝ホルヴェークの「弱さ」が肯定的評価なのか，否定的評価なのかを断定することはできない。しかし，その直前の文までを視野に入れた場合，発言の真の意図が明確になる。以下の引用は地の文として語られており，「私」とはヘルツフェルトを指す。

> 私はいつも，我々は力強い，名誉ある自己主張によって勝利を闘い取る

18）本稿では，「免責すること」と「擁護すること」を区別したい。本稿における「免責」は単に罪がないことを認めることであり，「擁護」はその立場に立ち，場合によっては代弁者の役目まで引き受ける用意がある心的態度を指すものとする。

19）ibid. S. 78f.

〔einen Sieg erkämpfen〕ことができると思っていた。しかし「人々はそれ以上を望んだのだ。」[20)]

彼自身，第１次大戦の従軍経験があり，その当時の思いをここに挿入している。かなり唐突であるが，この文こそ，論文全体の意図を探る重要な箇所である。「勝利」には不定冠詞が付けられ，それが何を指すか具体的に示されてはいないが，〈力強く，ドイツの名誉を損ねない形で自己主張することによって得られるもの＝勝利〉であると読むことができる。しかし「人々はそれ以上」，つまり，ミュラーやヘルツフェルト自身ら一部の良心的人間を除いて，国民はみな「自己主張」だけでは得られないものを望んだ。それは，これまでの引用ですでに明らかなように，戦火を拡大してできる限り多くのものを手に入れることである。したがって，ドイツの名誉を損ねない勝利とは，行き過ぎた軍事行動によらず一定の成果を挙げることである。その観点からすれば，軍部と民衆の要求を呑む一方で何の「自己主張」もできなかったベートマン＝ホルヴェークの「弱さ」は，ヘルツフェルトが考える「勝利」とはほど遠いものであり，実際に従軍経験を持つ「私」が当時望んだものではない。ヘルツフェルトのベートマン＝ホルヴェーク評価は多層的である。そうした複雑な評価の一端が，論文中一回限りの「私」の登場によって顔を覗かせているのである。

４.「誤った」政府の政策，「正しい我々」― リッターの場合

リッターにおいては，語り手の存在がこれ以上に顕著である。彼の論文「新たな戦争責任論？」では，数度，語り手「私」が登場する。たとえば，

今日，こうしたことすべて〔＝当時のドイツ人たちが，歴史家ハンス・デルブリュックの本に強く影響され，ドイツの勢力拡大の必要性を信じていたこと〕は，傲慢で錯誤的と批判されるかもしれない。確かに，「全ドイツ」の出版物には実際，威圧的＝攻撃的性格があった。〔しかし〕開戦前の教養ある若者層（私もその一員であったが）は，それとは違う感覚を持っていた。[21)]

20）ibid. S. 78.「　」部分は原文でも引用符（» «）が付けられており，さらに斜字体が用いられている。出典は明示されていないが，ミュラーの手記からの引用であると推測できる。ヘルツフェルトの原文では，man will と現在形が用いられているが，当時の自らの感情をミュラーと重ね合わせていると解釈できるので，あえて過去形で訳出した。

21）Gerhard Ritter: Eine neue Kriegsschuldthese? S. 649.

リッターも，ヘルツフェルト同様，第１次大戦での従軍経験を持つ。この引用は，彼がこの論文において，教養市民層出身の若者として戦争に参加した立場から発言していることを示している。これは，その直後の，彼らは「後ろ向きの愛国主義（ein rückwärts gewandter Patriotismus）」ではなく，「希望に胸ふくらませ（hoffnungsfroh）」,「より偉大な未来（eine größere Zukunft）」[22]を実現しようとしていたといった主張と合わせて読むと，たしかに戦争ありきの軍部とは一線を画しており，その意味でリッターら当時の若者と，彼の論文で論証しようとしている穏健なベートマン＝ホルヴェーク像が重なり合ってくる ―― つまり，自らと重ねることによって宰相を擁護する ―― ように見える。

しかし，そうではない。当論文におけるリッターの立場を知る上で非常に重要な鍵となるのは，論文中に多数使用されている所有冠詞 unser である。この unser は，論文の冒頭，これから論駁しようとするフィッシャーの見解をまとめる段階ですでに登場する。

> そうして，我々の戦時下の政治〔unsere Kriegspolitik〕が1914年９月にすでに完全なる狂気の沙汰に陥っていたという結論を読者自身が引き出すよう，この著者〔＝フィッシャー〕は誘導しているのだ。[23]

この引用は，ドイツ政府が初めから戦争を望んでいたということを，ほのめかすだけではっきりとは言わず，読者が自然とそのような印象を持つように誘導するフィッシャーの語りの手法を批判したものである。ここでは「我々の政治」と言われているが，unser が名詞 Politik と直接結びつくのは，20ページに渡る論文中この冒頭の１箇所のみであり，これ以降当時のベートマン＝ホルヴェーク，あるいは政府を取り巻く状況について記述する際にはすべて，定冠詞および形容詞 deutsch が付く形が用いられている。これを踏まえて，もう一度先に引用した以下の部分を思い出してほしい。

> ７月危機時のドイツの政治〔die deutsche Politik〕は，間違った思惑〔Fehlspekulation〕に基づいていた。つまり，ほぼすべての要素において誤った評価を下していたのである ―― ロシアとフランスの戦争準備については過小評価，暗殺がヨーロッパの宮廷に与える影響とイギリスの平和路線については過大評価していたのである。

22）ibid.
23）ibid. S. 646.

「間違った思惑に基づ」き，「誤った評価を下し」たのは，「我々の」ではなく「ドイツの」政治である。前述のように，リッターは当時軍に属していた。政治家ではないリッターが，あえて「我々の政治」という言い方をするのは，誤った「ドイツの政治」とは別に「我々の政治」が存在したことを意味する。では「我々の政治」とは何なのだろうか。テクストの他の部分に，「我々の目標」と多少表現を変えて以下のような文がある。

> しかしこれ〔＝戦争をし，バルカン半島からロシアを排除すること〕が我々の目標〔unser Ziel〕だっただろうか。我々の目標はむしろ，我々の同盟国オーストリアを大国の地位から転落させないことだったのではないだろうか。言い換えるならば，1914年のドイツ政治〔die deutsche Politik〕は攻撃的と理解すべきなのだろうか。それとも防衛的と理解すべきなのだろうか。[24]

４行目の「言い換えるならば（m. a. W.）」によって，「我々の目標」と「ドイツ政治」が等位に置かれている。つまり，ここでの「ドイツ政治」は，時の政府のことを言っているように見せかけながら，実際に指しているのは「我々の政治」の方である。[25] 最後の２文はいずれも疑問文であるが，リッターの答えはすでに「防衛的」と決まっている。「我々の政治」は「防衛的」だったのである。一方，軍部と民衆の圧力に屈し，事態をエスカレートさせてしまったドイツ政府の態度は防衛的とは言えない。したがって，「我々の政治」とは，健全ではあったが実現されなかったそれなのである。

５．結語 ― ヘルツフェルトとリッターのアイデンティティの置き場

ヘルツフェルトもリッターも，当時のドイツ政府を免責しようとしていることは間違いがない。しかし，当時の政府を擁護しようとしても，ヘルツフェルトとリッターの第１次大戦を見る視点 ―― 単純化を怖れず言えば，アイデンティティ ―― はそこにはない。ところで，第１次大戦どころか，第２次大戦が終結して15年以上が経過した60年代になって，なぜこのようなアイデンティティが再び想起され，本筋の論の端々に紛れ込み，その存在を主張するのだろうか。最後にこの問題について考えてみよう。

以下の引用は，ヘルツフェルトの論文のまさに書き出しの部分である。

24）ibid. S. 657.

25）ただし，「ドイツの政治」が「我々の政治」に読み替えられるのはここのみである。

> 第１次大戦時のドイツ史の諸問題は，1945年以降もたえず，第２次大戦での出来事と対をなすもの〔Gegenbild〕と見なされてきた。しかし，そうした意味づけにも関わらず，第１次大戦に関しては個々のテーマに至るまで数多くの研究がなされてきた。その量はドイツそれ自身よりも，外国，特に合衆国の方がずっと多かったのである。[26)]

彼によれば，第１次大戦の解釈にはすでに決着がついている。しかし，それにも関わらず，相変わらずアメリカを中心に研究は継続され，「過去の克服」が盛んに叫ばれ始めた60年代に入って，ついにフィッシャーのような著作が出るに至った。フィッシャーの本は，単に個別のテーマに関してあれこれ事実を掘り出すだけでなく，これまで固定化されていた第１次大戦の意味づけに変更を迫る事態をも招来することとなった。「弱い」ベートマン＝ホルヴェークが覆され，軍部と足並みを揃えて戦争へと突き進む「強い」ベートマン＝ホルヴェーク像が構築されることは，ヘルツフェルトにとって，「自己主張」や「名誉」をよりどころとしてきた自己像が変更されることを意味する。すでに先の引用で見たように（注釈19および20），ベートマン＝ホルヴェークの「弱さ」と自らの「名誉」は表裏一体のものであった。

同様の疑問をリッターにも向けてみよう。その際有効なのは，彼の論文の最終段落に突如として登場する語「自己賛美（Selbstvergötterung）」である。この語は以下のように使用されている。

> ここ〔＝フィッシャーの著作〕において，今日流行している政治的歴史解釈の潮流は，初めてその頂点に達した。その潮流は，ドイツの歴史意識を自ら暗いものとし，1945年のカタストロフィ以来，以前の自己賛美を抑圧し，たえず一方的に幅を利かせてきたように思えるのだ。[27)]

第１次大戦時にすでにドイツ人たちの心中にあり，第２次大戦中も維持されてきた「自己賛美」が，1945年以降徐々に押さえ込まれ，60年代のドイツにおいて完全に抑圧されてしまったことに異議を唱えている。リッターの論文をベートマン＝ホルヴェークを擁護するテクストとして読み進める限り，この「自己賛美」はあまりにも唐突であるばかりか，それが何を指すのか特定することも不可能である。しかし，本稿でのこれまでの考察をふまえれば，その内容は明らかである。すでに見たように，リッターの自己意識は，ベー

26）Hans Herzfeld: Zur deutschen Politik im ersten Weltkriege. S. 67.

27）Gerhard Ritter: Eine neue Kriegsschuldthese? Zu Fritz Fischers Buch „Griff nach der Weltmacht.“ S. 668. 傍点は引用者が付したもの。

トマン＝ホルヴェークの政府とは相容れない，健全でありながら実現されなかった，もうひとつの政治のあり様（「我々の政治」）にあるのであり，そうした「自己」を「賛美」することができたということは，「我々の政治」がたとえ日の目を見なかったにしても，自ら誇りを持つことが許されていたということである。

だとすればリッターは，「自己賛美」が引き続き許容されたどころか称揚されたナチズムを高く評価するのだろうか。答えは否である。反ナチ運動家として，終戦直前の1945年２月に処刑されたカール・ゲルデラーについて書いた本（1954年初版）の序章で，リッターは以下のように言っている。

> 国民の自己賛美〔Selbstvergötterung〕および自然の生命力の美化を説くナチズムは，〔当時の人々にとって〕非常に大きな魅力を持っていた。[28)]

この引用でも「自己賛美」という語が使われているが，ここでは直後に「えせ宗教」[29)]と言われていることから分かるとおり，否定的な意味である。脈々と受け継がれてきた「自己賛美」のうち，ナチズム下のそれは偽物であり否定されるべきである。しかし，だからと言って，第１次大戦時の「自己賛美」まで抑圧されるようなことがあってはならない。当時ヘルツフェルトやリッターが抱いた「自己賛美」は，軍部主流派の好戦性とも，政府の軟弱さとも異なる健全なものだからである。

先述のようにリッターは，第２次大戦後，歴史を見る目は大きく変わり，「自己賛美」を抑圧する方向へと動き出したことを批判している。しかし，そのリッターも，すでに固定化したはずの第１次大戦像に変更が加えられつつあることを嘆くヘルツフェルトも，彼らの批判を自らの論文においてあからさまに展開してみせることはない。また，彼らのアイデンティティは軍部（ただし，彼らが良心的な思考を持つと判断する一部の軍人たち）にあるが，それも明確に表明されることはない。それらは，あくまでベートマン＝ホルヴェークの戦争意志の有無を語る文脈において，わずかにそのすきまから顔を覗かせてくるだけである。彼らは抑圧行為を批判しつつも，自らのアイデンティティのありかを自由に表明できているわけではない。言い換えれば，彼らもその抑圧行為に取り込まれ，それを乗り越えられてはいないのである。

28）Gerhard Ritter: Carl Goerdeler und die deutsche Widerstandsbewegung. Ungekürzte Ausgabe. München(Deutscher Taschenbuch Verlag). 1964. S. 16.

29）ibid. 一方，これと対照的にリッターが称賛するのは，反ナチ運動家たちが「礼節を土台とした真の新しい民族共同体の建設（Aufbau einer neuen, echten, von sittlichen Grundsätzen getragenen Volksgemeinschaft）」（ibid. S. 16f.）を目指していたことである。

„Verdrängte“ Identitäten — Eine Analyse der Diskurse von den anti-Fischer-Historikern

Masanao WATANABE

Fritz Fischers These, dass die deutsche Regierung im Ersten Weltkrieg von vornherein einen Krieg wollte, ist von anderen Historikern viel Kritik entgegengebracht worden. Die Wichtigsten von ihnen sind Gerhard Ritter und Hans Herzfeld, die beide den Krieg als Soldaten erlebt haben. Sie behaupten, eigentlich habe die damalige deutsche Regierung keinen Willen zum Krieg gehabt, aber unter dem „Doppeldruck“ der Armee und der Öffentlichkeit sei sie in den Krieg geraten und dabei habe sie auch ihre eigene Macht und ihre Möglichkeiten überschätzt. Um diese These zu beweisen, berufen sich die beiden Historiker darauf, dass das damalige Deutschland zu schwach gewesen sei, um Großmächte wie England und Frankreich zu besiegen. All diese Logik scheint den damaligen Kanzler Bethmann-Hollweg zu verteidigen. Aber das wollten die Historiker nicht. Im Gegenteil: Sie wollten ihn kritisieren.

Um das festzustellen, werden in der vorliegenden Arbeit die Wörter „ich“ und „unser“ betrachtet, weil man daraus ersehen kann, von welchem Standpunkt sie den Ersten Weltkrieg beschreiben.

Bei Herzfeld ist das Wort „ich“ nur einmal zu finden. Er erzählt seine eigenen Erinnerungen im Ersten Weltkrieg folgendermaßen: „Ich dachte immer, dass wir allein schon durch eine kräftige und ehrenvolle Selbstbehauptung einen Sieg erkämpfen würden. »*Aber man will ja mehr.*«“ Diese überraschend eingeschobenen Sätze lassen sich nicht sofort verstehen. Aber wenn man sie mit ihren Kontexten genau analysiert, zeigt sich Folgendes: Das Wichtigste für Herzfeld als Soldaten war die „Selbstbehauptung“ und eben die hätte Deutschland einen Sieg bringen sollen. Diese Idee ist zugleich auch eine Kritik an Bethmann-Hollweg, weil ihm weder im Inland noch Ausländern gegenüber die „Selbstbehauptung“ gelungen ist.

Ein charakteristischer Ausdruck bei Ritter ist „unser“: z.B. „unsere europäischen Grenzen“, „unsere Kriegsflotte“, „unser Außenhandel“ usw. Es ist schon komisch, verschiedene Sachen mit „unser“ zu benennen. Aber was man hier besonders ins Auge fassen muss, ist „unsere Kriegspolitik“. In seinem Text benutzt Ritter auch das Wort „die deutsche Politik“. Das bedeutet, für ihn gibt es zwei voneinander ganz verschiedene Arten von Politik: eine ideale, die er damals wollte, und eine reale, die von der deutschen Regierung geführt wurde. Dabei ist die Letztere negativ bewertet,

weil, wie gesagt, „die deutsche Politik“ nicht die Stärke hatte, sich den Großmächten gleichstellen zu können.

Es ist nicht falsch, dass die beiden Historiker Bethmann-Hollweg die Schuld des Ersten Weltkriegs erlassen wollten, aber sie wollten ihn nicht vollständig verteidigen, sondern sich sogar über seine Schwäche beschweren.